

ある日、「ふたば未来学園の校歌のことで相談をしたい」と、秋元さんに呼ばれ、秋元さんの事務所で二人で話しました。

秋元さんから二つの話がありました。今回の作詞はご自分でなく、誰もが知る、普遍性の高い方をお願いしたいということ。そして作曲は僕にと。

僕は、僕の母校である金透小学校の百周年に「金透讃歌」を書いてくださった谷川俊太郎さんをお願いできたらと思いました。秋元さんもととてもいいと言いました。

ふたば未来学園の校歌は、「多様をやさしく包むもの。おたがいの違いを尊重し合えるような歌」にしたいと、僕は思いを谷川さんに伝えました。

そして、谷川さんから、素晴らしい詞が届きました。僕は、言葉たちにすでにメロディが宿っているように感じました。

掛け声でなく、強要でなく、ひとりひとりのパーソナルな思いが集積する、そんな校歌であるようにと、作曲をさせていただきました。

話をすると、福島の子供たちは、重荷を背負い過ぎていて僕は時々心配になります。

故郷の役に立ちたいと思いついてる子、

復興の期待を大人達からかけられ過ぎてる子。

もちろん尊いことですが、本当はもっとふつうに恋したり、喧嘩したり、ふざけたり、してほしい。

ふたば未来学園は、双葉で教育を受ける権利のある生徒にとって、堂々と学べる場所。

僕はそう考えて、この学校に寄り添い続けさせていただければと思っています。

箭内道彦